川崎市立小学校体育研究会

麻生支部研究会だより

令和５年１２月

麻生支部授業研究会

１１月１５日（水）に片平小学校にて麻生支部授業研究会が行われました。子供たちが積極的に交流しながら鬼遊びや跳び箱運動を楽しむ姿が見られました。ご多用の中、授業の準備をしてくださった片平小学校の皆さん、参観された皆さん、ありがとうございました。

授業後の協議会では、規則の工夫や場の工夫についての話が多く出ました。講師の先生からのお話では評価についてのお話をいただき、様々な領域に共通することを学ぶ機会となりました。協議会や講師の先生からのお話を抜粋してご紹介します。

研究討議

○意見　⇔反対意見　★授業者　☆講師の先生のご回答

２年生　ゲーム　鬼遊び　「宝を運べ！全員集合～仲間と一緒にさらにむこうへ～」後藤先生

規則の工夫について

○スペシャルボール（得点３倍）は多くの子が得点する機会が増えてよかった。

○スペシャルボール（得点３倍）を持っている子自身が楽しんでいた。端を走っている子（スペシャルボールを持っていない子）は、鬼遊びの楽しさを楽しめなかったのではないか。スペシャルボールを色々な子が持てるようなルールがあるとよかった。

★秘密ラッキーマン（倍得点とれる人）は見えない状態で行った。見える状態でやるか、見えない状態でやるかは両方試して、比較して次時以降に活かしていく。

○音楽の間に作戦タイムがあってもよかったのではないか。

★友達のよい動きをクラスで共有していた。作戦と呼べるほどのものはまだやっていない。次時以降やっていく。

○スーッと鬼のラインの横を抜けていくだけで鬼遊びの楽しさは味わえているのか。

☆２年生の発達段階と学習内容を考えると、鬼遊びの楽しさはそれで味わえている。

その他

○音楽をかけることで、子供たちはスムーズに次の動きに向かうことができていた。

○ねらいをもった上での工夫にすると、子供たちはもっとわかりやすくなったのでは。

６年生　器械運動　跳び箱運動「仲間と一緒にさらに向こうへ～より大きくダイナミックに～」須田先生

場の工夫について

○サーキットが技の上達に繋がっている。切り返し系の予備運動と回転系の予備運動を別々にやってもよかったのではないか。サーキットで両方一気にやった後にすぐ切り返し系の技に取り組むと、回転系の技に取り組むときに生かされる力が弱くなってしまうのでは。

☆サーキットは最初に一気に取り組む流れでよい。（感覚つくりの運動として準備運動にもなるので。）

○できる子たちが苦手な子たちに教える機会がもう少しあってもよかったのではないか。

⇔○教える機会を増やすと運動量が減ることにもつながるので今日の状態でよかった。

○場の数が多く選択肢があり、スモールステップで進めることができる。一方で、自分に足りない部分がわかっている子もいればそうでない子もいたので、伝えられる機会があるとよかった。

○切り返し系の指導のポイントとしては、腰の高さ・目線・着手の場所・肘を伸ばして釘を打つイメージ、を指導できるとよい。

⇔○技能指導面で指導していきたいことは色々あるが、大切なことを精選していくと「ドン　パッ　ピタッ」になるのではないか。

○教師の立ち位置が今回、技が終わったあとの向こう側にいることが多かったが、単元の４時間目ならば児童側にいて、児童目線でポイントを声かけしてあげるとよいのではないか。

○GIGA 端末の活用について。自分の動きが可視化できてよい。必要に応じて、タイムシフトカメラの活用も有効であるが、視点を明確にした上での活用が必要となる。

指導講評：山室　忠敏先生　（川崎市立小学校体育研究会助言者　川崎市立はるひ野小学校　教頭）

授業の視点

「よい体育の授業」のスタンダート

①精一杯動く・・運動量

②できた経験・・技能向上

③仲良く運動する・・協力

④「わかった」の実感・・知的理解

・本時のねらいは明確か

・学習内容が「学習のねらい」に沿ったものになっているか。
活動中の声かけがねらいを達成するものになっているか（ボール運動やゲームの単元においては、必要な声かけはどんどん行い、子供の取り組んだことに価値付けることが必要。うるさいくらいに。）

・その時間の評価の観点が本時の「学習のねらい」から外れていないか。

・「学習のねらい」に沿ったふりかえりになっているか。（ふりかえりへの発問も然り）

上記の視点に照らし合わせて今日の授業について

２年生の授業について

・子供同士が友達のよい動きによく気がついていた。ふりかえりでどんどん取り上げて実際にやってみせるともっと共有できる。

・指導案で「工夫する」だとめざす子供の姿が曖昧になってしまう。「バリエーションを増やす」「難易度を高める」など具体的にすると、動きを高めるための工夫につなげることができる。ねらっている学習内容を得られるための「工夫」になるようにするとよい。

６年生の授業について

・易しい場があると子供が安心してできる。学習カードがねらいに沿っていてよい。

・できれば同じグループの中で教え合えればいい。できる子は自分のねらいを達成すればいい。無理して得意な子が苦手な子に教える機会をつくる必要はない。もしやるのであれば、単元の前半にそのような時間を設定すればよい。

◎思考・判断・表現等の評価をどうしている？

・PDCA サイクルの確認。

・学習の機会均等が必要（行動観察だけでなく、子供が考えたことを誰もが表現できる活動→学習カードの活用）

・思考・判断・表現に限らず、めざす子供の姿（学習内容が身についた状況）を教師自身がもっていれば、子供の状況をみとりやすくなる。単元における各観点の評価時期も事前に計画して、日々の評価を積み重ねていく。単元終了時点で、積み重ねた評価を総括的にまとめることで的確な評価に近づけることができる。

担当：堀越　加奈美（千代ヶ丘小）　　文責：中島　真知子（柿生小）